【308】

氏　名（本籍）	安田宗生（福岡県）（やすだ むねお）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　乙　第　1865　号
学位授与年月日	平成14年7月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	近世・近代における熊本の大衆芸能 －肥後琵琶と軍談を中心として－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	真野俊和
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	古家信平
副　査	筑波大学助教授		千本秀樹
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	谷川彰英

論文の内容の要旨

本論文は，熊本県地方における近世・近代の大衆的語り芸能，琵琶・軍談の歴史的変遷を，その継承と断絶という両側面から論じた研究である。全体は大きく2部8章から構成されている。

第1部「肥後の琵琶師－近世から近代にかけての変遷－」では，主として肥後藩及び天領であった天草に伝承されてきた大衆芸能，肥後琵琶が考察の対象とされている。

「一　研究史」で著者は，九州の盲僧琵琶に関する従来の研究は，東洋音楽，国文学的関心に基づくものが多数を占めていたことを指摘し，これに対して本論文における関心は，近世における盲僧と当道の関係のあり方や，近代以降，盲僧や当道に属していた琵琶師が歩んだ道筋を明らかにするところにあるとしている。

「二　琵琶師の活動」において著者は，昭和53年当時において熊本県下における16名の琵琶師の存在を確認した。本章では彼らの活動の特徴として，「くずれ」と称する長い語り物を語る芸能的側面と，新築儀礼等の際に各種祈祷や祭文を語るなどの宗教的側面の二つの領域にまたがっていること，弟子は師匠から習得した外題に自分なりの工夫を加えて独自の芸風を作り出すことが許されたため，厳格な流派は形成されなかったこと等を明らかにされている。

「三　琵琶師聞き書き」では，著者は山鹿良之・橋口桂介という現存する二人の琵琶師に対してインタビューを行った。その結果，師匠への弟子入り・修行から始まり，琵琶師としての芸能・宗教活動の内容，職能集団としての秩序や行事への参加，さらには鍼灸師という琵琶師とは別の活動など，多岐にわたる生活の様相が明らかにされた。特に門付けを通した芸能活動の実態，及び天草地方在住の盲目の芸人が所属しなければならないとされる妙音講の組織と祭の実態が詳細に記述されている。

「四　近世の肥後琵琶」で著者はこの芸能の歴史的様相に目を転じ，肥後琵琶の特色を明らかにした。肥後の琵琶は近世（延宝2年以降）においては当道座と呼ばれる組織に属した琵琶師によって弾奏されており，当道は平家物語に代表される「くずれ」と称する語り物を語ると同時に，盲目の僧侶である盲僧の職分とされる種々の宗教的行事にも関与してきた。肥後藩以外の地域に伝承される琵琶はいずれも盲僧が伝えてきたものであったが，盲僧にとって音曲としての琵琶は取り締まりの対象であったこと，それに対して肥後の琵琶師のみは宗教行事に関与しながらも公然と「くずれ」を語ることが許されていたこと等が明らかにされ，その結果として彼らは自らが

芸能者であるという意識を持ち得たところに大きな特色を有していると，著者は強調している。

「五　明治の肥後琵琶」で著者はさらに，明治を迎えた肥後の琵琶師たちが時代の変転にどのように対処したかという点に目を向けた。明治時代の肥後琵琶は当道の伝統を引く妙音講に属して近世以来の活動を維持していたが，明治30年代に入ると肥後の琵琶は薩摩・筑前両琵琶や軍談の流行など，人々の娯楽の嗜好が変化するという事態に直面することになった。そこで琵琶師たちは，自らの琵琶を「肥後琵琶」と呼んで特色を強調する一方，軍談の第一人者，美當一調の語り芸の影響も積極的に受け入れようとした。こうした様相と経緯とが，当時の新聞資料や山鹿・橋口両琵琶師からの聞き書きを通して明らかにされている。

第２部「軍事講談－軍談師美當一調から軍事教育尾藤新也へ－」は，「日清戦争談」を語って全国的に知られる存在になった軍談師美當一調（本名尾藤新也）について論じたものである。

「一　美當一調の生涯」で著者は，一調は大衆芸能としての浪花節史を語る上で必ず名が挙げられる人物であるにもかかわらず，彼に関する資料が少なかったため，ほとんど研究されることがなかったことを指摘する。そこで著者は，尾藤家に残されている史料（宛状・知行目録など），彼の書き残した「興行日記」，県政資料，及び彼が活躍していた時期の新聞記事を用いて，従来の一調に言及したものを検討し，彼の生涯を明らかにしている。

「二　軍談師美當一調の誕生」では，一調が軍談師として立つようになった契機や，伝統的な外題を語って熊本で評判の軍談師となっていた一調が近代の戦争談を語り始めた経緯についても，著者は新聞記者によるさまざまなインタビュー記事を通して明らかにしようとした。日清戦争が起こるとこれを外題にして語る芸人は多く出てくるが，一調は三味線を伴奏楽器としたり，客観的描写に重点を置くなどして人気を博したこと，特に「日清戦争談」は人気が高く，明治31年に東京借行社で皇族・大臣・陸軍将官の前で講演したこと，等によって彼の名は一躍全国に知られるようになっていく経緯が明らかにされている。

「三　軍事教育尾藤新也」では，一調の軍談が国家からも注目されていく側面が明らかにされている。国家は明治20年代後半から大衆芸能を国民教育の手段として利用すべきという考え方に変わってくることが指摘され，特に軍は一調の軍談に目をつけたことが述べられる。一調が登場したのは日清戦争後その動きが加速される時期であり，彼の歩んだ道を詳しく追っていくことによって，国家が国民教化のひとつの手段として大衆芸能をどう利用したかということをよりよく理解できると著者は強調する。そして最後に著者は，国家による大衆芸能の統制は軍談だけにとどまらず，琵琶や浪花節など大衆に人気のある芸能においても同様であり，このような国家と芸能の関係は第２次世界大戦まで続くと述べている。

本論文の巻末には，本論文に関連する各種資料が網羅的に収録された。第１部に関しては「当道略記」および「熊本の琵琶関係新聞資料」が，第２部に関しては「美當一調関係新聞資料」「美當一調『日清戦争談』全18巻序文集」等である。

審査の結果の要旨

本論文は熊本県地方における大衆芸能の歴史を，近世～近代という長い時間的視野のもとに跡づけようとした意欲作である。本論文の評価としては次の４点に集約されよう。

第１は，肥後琵琶が，従来は九州の他の地方と同様に盲僧によって担われていると考えられていたのを，当道座に属する盲人によって担われていることを明らかにしたことである。これは九州地方の琵琶盲僧研究における盲点であった。

第２は，明治期の琵琶の薩摩琵琶，筑前琵琶など他の地方の華やかな琵琶や，軍談という新たに勃興した新興芸能などとの競争関係のなかで，自らの改良・生き残りを模索していた様相を解明しえたことである。

第３は，軍談流行の主役ともいえる美當一調なる人物の生涯や芸能活動の内容を詳細に発掘解明したことである。美當一調の軍談は先行するさまざまな大衆芸能の集大成ともいうべき様相をもち，そのなかには肥後琵琶の

影響も含まれていた。また巻末に納められた膨大な新聞資料は，今後の当該分野研究にとって第１級の資料集成となるであろう。

第４に，軍談が当時の国家にあっては単なる大衆芸能にとどまらず，ナショナリズムを喚起する手段として利用されていたことを指摘した点である。即ち美當一調は一面で軍事教育家としての側面も当時の社会の中で果たしていたといえるのである。

ただ本論文の課題を２点ほど指摘しておきたい。第１は，琵琶と軍談の，芸能としての連続性が今ひとつ明瞭でなかったことである。これはともに時間の制約をうける芸能であることからやむを得ない点でもあるが，今後の音声･映像資料の発掘に期待したい。第２は一調の軍談そのものの分析が本論文では本格的に行われていなかったことである。今後，一調の残した軍談テキストにより深く踏み込んでいくことによって，著者のいう「軍事教育」の内容をより鮮明にすることができるであろう。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。